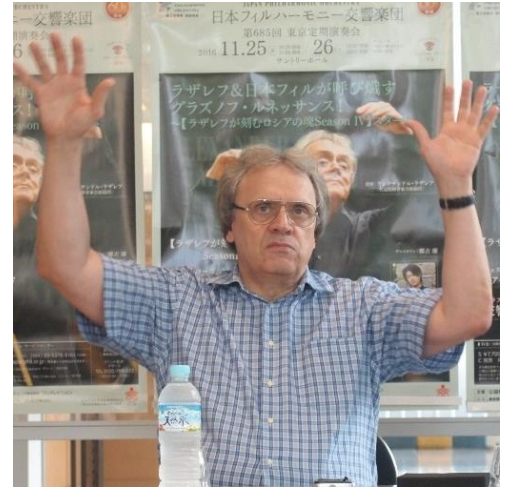


ラザレフ、大いにグラズノフを語る

2016年7月6日(水)杉並公会堂 (通訳:小賀明子さん)

いつもの厳しいリハーサルの後、ホワイエで懇談会を行いました!



—彼は音楽のために生き、音楽は彼の中に生きていた

19世紀のロシアにおける音楽界には、もちろん偉大なチャイコフスキーがいました。モスクワの作曲家です。ペテルブルクにいたのは、リムスキー＝コルサコフです。偉大な権威ですね。彼らは素晴らしい名声と素晴らしい芸術性で他の作曲家たちの前を行っていた存在です。グラズノフはリムスキー＝コルサコフの弟子だったわけですが、その年の差は21歳。グラズノフにとって恩師であるとともに、先輩作曲家という存在でした。私は19世紀の数々の優れた作曲家の中で、グラズノフは他の誰にも引けを取らない素晴らしい作曲家だと思います。父親が本の出版社に勤め、母親が音楽家という家庭に生まれ、素晴らしい教育を受けました。グラズノフ自身が「私は24時間作曲をしても全く飽きることがない」と言っています。彼は音楽のために生き、音楽は彼の中に生きていたといえましょう。

—学生の間で人気のあった、権威のある尊敬された学長

グラズノフの人生はペテルブルグにずっとあり、リムスキー＝コルサコフをとてサポートしていました。グラズノフはどちらかというといわゆるロシア5人組に近い存在でした。5人組の中に名を連ねているポロディンが、オペラ《イーゴリ公》を25年間かけて書き上げており、ポロディンが出来上がったオペラをピアノで弾いて仲間に披露するという会があったのですが、グラズノフはそこに遅刻してしまいました。ポロディンが序曲を弾いているとき、遅れたグラズノフはドアの外に立って聴いていました。その後ポロディンが亡くなり、《イーゴリ公》の手稿が残った時、リムスキー＝コルサコフはグラズノフを呼び出し、残ったポロディンの手稿を何とかうまくまとめないか、という作業を与えたわけです。オーケストレーションがきちりできていないところもあれば、作品の中には最後までできていないところもあり、まだまだ手を加える必要があったわけです。序曲に至っては資料がまったくありませんでした。彼は音符として残していなかったのです。ポロディンが自分の作った序曲を演奏して聴かせてから何年もたってから、グラズノフはドアの外で聴いたその序曲を、自分の記憶力でそれを音符に書き起こした、と聞いています。素晴らしい音楽的な記憶力と音楽性を兼ね備えていたという証明です。

そしてグラズノフは長年にわたってペテルブルグ音楽院で教鞭をとりました。リムスキー＝コルサコフがペテルブルグ音楽院の学長を退いてから、彼が学長になったわけですが、それから20年ほど学長を務めています。彼は非常に学生の間で人気のあった、権威のある尊敬された学長でした。グラズノフが学長を務めていた間に学んでいた学生に、プロコフィエフがいます。グラズノフは、最初はこういったそうです。「プロコフィエフの音楽は、ちょっと私にはわかりかねるが、しかしこの若い作曲家はなんとしてもサポートしていかなければならない。彼の才能は非凡である。」と言っています。そして、若いショスタコーヴィチがペテルブルグ音楽院に入学するときも、グラズノフは非常に力を注ぎました。

—ラフマニノフ交響曲第1番初演について

そして、みなさんもラフマニノフの交響曲第1番をめぐるエピソードはよくご存じだと思います。ラフマニノフの交響曲第1番はペテルブルグのフィルハーモニー協会の大ホールで初演されました。そこで指揮をしたのがグラズノフでした。どうやら、この交響曲、グラズノフはあまり好きではなかった。ちょっとカットしたらいいのではないかとラフマニノフにも言っていたそうです。ラフマニノフは嫌だと言いました。そして、グラズノフは初演に向けてのリハーサルもあまり熱心に取り組まず、不十分なリハーサルで本番に臨むことになってしまいました。本番の日ですが、グラズノフはお昼ご飯を食べにレストランに行き、飲みました。何を飲んだかは知りませんが、飲みました。そしてラフマニノフの交響曲第1番の初演は惨憺たる結果になってしまったわけです。リムスキー＝コルサコフ、リヤードフ、キュイといった非常に優れた作曲家やお客さんもたくさん来ていたのですが、評も反応もとてもよくなく、初演は大失敗に終わってしまいました。



ラフマニノフはご存じのとおり鬱状態に陥り、その後数年作曲をすることができなくなってしまいました。彼が次に書き上げた曲がピアノ協奏曲第2番で、これはウラジーミル・ダーリという彼を鬱の状態から救ってくれた精神科医に捧げられています。ただ、ラフマニノフはグラズノフのことを一言も悪くは言いませんでした。ペテルブルグの初演が失敗に終わった後、彼はモスクワに帰っていくのですが、帰る前にグラズノフのところに行って、1時間話をしたそうです。何の話だったか誰も知りません。でもラフマニノフはその後もグラズノフについてよい言葉だけ残しています。そして1928年にウィーンで開かれていたコンクールに招かれて、グラズノフがウィーンに行きました。その頃ラフマニノフはピアノの名手として名を知らせていました。グラズノフは健康に不安を抱え、ラフマニノフはグラズノフに治療費としていくらか援助をしていたと、聞いています。グラズノフの、人々の尊敬を集めるという、人間像が浮かび上がってくると思います。

1908年にリムスキー＝コルサコフが亡くなった時に、世の中ではこういうことが言われました。「もちろん巨匠がいなくなったのは寂しい、悲しい。でも我々にはまだグラズノフがいるではないか」。リムスキー＝コルサコフの後継者という目でグラズノフはみられていたということです。

―見事にオーケストラを生かすオーケストレーション

グズノフの音楽は、チャイコフスキーやリムスキー＝コルサコフの音楽ほど、人気としてはさほど高くないといえるかもしれませんが。しかし作曲家としてのグズノフは音楽的知識にとっても長けていて、交響楽についてもよくわかっていましたし、劇場音楽についてもわかっていました。オーケストラの特性もよくわかっていました。オーケストレーションにも非常に長けていて、オーケストラにある楽器の特性を生かしながら、素晴らしいオーケストレーションをすることができました。チャイコフスキーだと、オーケストレーションの中に、楽器の使い方がいまいちだな、というところがあります。リムスキー＝コルサコフにも少しですがあります。グズノフのオーケストレーションは、本当に見事で、オーケストラの細かいところもよく聞き分けて、各楽器に対する自分の知識を、音楽の特性を使って上手に作曲しています。自分の知識、経験を、やはり素晴らしいオーケストレーションの名手であるシヨスタコーヴィチにも伝えています。

グズノフの作品の特徴として、弦を必ず他の楽器でサポートする。弦だけではなくて、弦と木管、弦と金管など、必ず支えてくれる楽器がいるということです。例えば5番交響曲をみても、すべてがダブルです。ほとんどがダブルになっている、または層になっているので、シヨスタコーヴィチの作品にあるような大きなソロ、というのがあまり出てこないのが特徴だと思います。ですから、音形が、重い層になっている、というのが特徴の一つですね。それをうるさくなく、厚みのある音に仕上げなければいけない。たとえば《ライモンダ》の中に、すごく美しいピアノのソロが出てくるパリエーションがありますけれど、そういうソロパートをどこかの楽器に奏でさせるということが、ミニマムにされているということではないかと思えます。そのグズノフの厚みのある音形というのは、ラフマニノフにも伝わっていると思えます。チャイコフスキーはちょっと違いますね。チャイコフスキーの場合は、オーボエがソロを吹いて、みんなが伴奏するという形があります。チャイコフスキーは、こんな天才なのになんでこんなことしちゃったんだろう、と頭が痛くなるところがありますが、グズノフはそういうところは一つもありません。どの楽器が何をすべきかということが、グズノフの作品の中では明確明瞭に見事に使い分けができています。



―グズノフのバレエ音楽とンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ

グズノフの作品はあまり演奏されていないですが、素晴らしい交響曲を8曲、未完成のものを1曲残しています。私たちは、これからバレエ音楽を演奏していきます。彼は3つのバレエ音楽を書いています。30歳の時に最初のバレエ作品《ライモンダ》を書いています。マリンスキー劇場のために作ったバレエでした。チャイコフスキーの《白鳥の湖》、きれいな音楽がたくさん入っていますよね。でも、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ。これだけなんです。《白鳥の湖》は、1/3は非常に美しい音楽があります。2/3はンパ、ンパ、ンパ・・・です。チャイコフスキーをとて尊敬していたグズノフは、《ライモンダ》の中で1/3は名曲を、力を注いで素晴らしい音楽を書きました。2/3は、本当に尊敬するチャイコフスキーのマネをして、ンパ、ンパ、ンパ、ンパ・・・で終わっています。2つ目のバレエは、エルミタージュ(ロシアの皇帝たちが冬の間住んでいた宮殿)の中にとて素晴らしい劇場があり、その劇場のために作ったバレエ作品です。宮殿の中の劇場なので、誰でも来られるようなものところではなかったと思えます。プティパが振り付けた《お嬢様女中》は1幕バレエです。1作目は、大きなバレエ作品の中の、よい音楽だけは1/3パートでしたよね。《お嬢様女中》になると、1幕バレエなので、ずっと尺が短いわけですから、その1/3のいいとこどりがてんこ盛りになっていると考えてください。



さらにその翌年にもう一つバレエ作品を書きました。これもまたプティパが振付けて、エルミタージュ劇場のために書かれた作品です。それが《四季》です。7月8日、9日に我々が非常に名演をしなければならない作品です。素晴らしい音楽ですよ。ンパンパンパがない、いい音楽尽くしの作品です。《お嬢様女中》も《四季》も、エルミタージュ劇場で初演されて、すぐに大舞台であるマリンスキー劇場で上演されるようになりました。

《四季》は、初めてのストーリーのないバレエ作品と言えましょう。《ライモンダ》や《白鳥の湖》ではストーリーがある作品ですが、《四季》にはストーリーがありません。霜とか雪とかイメージ付けはされていますが、もちろん登場人物はいるのですが、みんなとても抽象的な役割を果たしています。この後、ドビュッシーやストラヴィンスキーがストーリーのないバレエ作品を書き始めます。ですので、この《四季》という作品は、非常に重要なバレエ音楽と言えましょう。他にも《四季》というタイトルが付いた作品があります。有名なのはヴィヴァルディの《四季》です。これは、「春」から始まっています。ハイドンにも《四季》というオラトリオがありますが、1楽章はやはり「春」。ヴィヴァルディにしてもハイドンにしても、とにかくロシアから離れたところの作曲家です。ロシアの作曲家にとって、四季は「冬」から始まります。チャイコフスキーのピアノ作品《四季》も、最初は1月です。季節は「春」が始まりではなく、ロシアでは「冬」から始まります。グズノフの《四季》も「冬」から始まり、最後の楽章は、豊かな実りの「秋」です。その実りの秋の後には、また寒い冬が来る。冬から始めて、また秋の終わりにちょっと冬を予感させて、グズノフは1年を締めくくっています。

私はこの《四季》という作品を、日本で、私のオーケストラ日本フィルと、共演したかった。今回その機会を持ち、この素晴らしい偉大なロシアの作曲家の作品を日本フィルと共演できることをとてもうれしく思います。とても責任のある仕事ですが、しかし、天才グズノフが遺してくれた作品は、きっと私たちに力を貸してくれると思えます。ありがとうございました。